

年少者に対する日本語教育支援の研究 (3)

— コミュニティにおけるJSL日本語支援モデルの構築 —

松井 洋子・早野 慎吾

A Study on Japanese Support for Elementary and Middle School Students (3)

— Formation of a JSL Educational Support Model in a Community —

Yoko MATSUI Shingo HAYANO

1. はじめに

最近の社会状況の変化の中、1990年6月に「出入国管理及び難民認定法」の改正が施行され、それ以来日系人を含む外国人労働者が急激に増加した。そしてそれと共にこれらの外国人に同伴される子どもの数が急増し、以来日本語を第二言語として (Japanese as a Second Language: JSL) 学ぶ外国人児童生徒 (以下JSL年少者) の学校への受け入れが始まった。

日本語指導が必要なJSL年少者数は、県別に大きく異なり、文部科学省の調査 (平成17年9月1日) では、愛知県 (3,620人)、神奈川県 (2,219人)、静岡県 (2,044人) のように2,000人を超える県もあれば、和歌山県 (7人)、長崎県 (8人) のように10人未満の県もある。JSL年少者の多人数地域では不就学のJSL年少者が急増して社会問題となっている。JSL年少者の少人数地域では、多人数地域とやや異なった問題が発生している。井上・早野 (2006) や松井・早野 (2006) では、JSL年少者少人数地域に属する宮崎市およびその周辺地域をフィールドに実地調査を行い、その問題点を報告した。

宮崎県における大きな問題点は、少人数であるが故に、教育だけでなく制度においてもJSL年少者支援の体制ができていないことである。JSL年少者が継続的に在籍する学校は少ないため、ほとんどの場合、その場限りの支援が行われている。学校間や組織間でネットワークもなく、組織的な支援もほとんどないのが現状である。そのような状況にある宮崎県では、学校を含めた地域社会でどのような支援が必要であるかを多角的に分析する必要がある。松井・早野 (2007) では、調査結果の解説と今後必要とされる支援について分析した。今回は、井上・早野 (2006)、松井・早野 (2006、2007) で調査したJSL児童生徒・学校現場 (教員・通訳)・保護者の結果を総合的に分析し、地域社会 (コミュニティ) が行うべきJSL年少者支援に関するモデルを構築し、その構造について解説する。

2. JSL年少者支援のモデル化

井上・早野(2006)、松井・早野(2006、2007)では、宮崎地区をフィールドとして学校現場(教員・通訳)、保護者自身の生活環境、学習環境などに関して、多面的な調査および分析を行ってきた。また佐藤・早野(2007)ではJSL年少者多人数地域の真岡市の状況を報告している。本稿では、これまでの調査結果を総合的に分析し、JSL年少者に対してコミュニティが行うべき、JSL年少者支援のモデルを構築する。このことにより、各地域でのJSL年少者支援で何が充実しており、何が不足しているかを、視覚的にも把握することが可能となる。今回はモデル構築に使用した松井・早野(2006、2007)の面接調査による結果を一覧表として提示する(資料)。

これらの調査結果から、JSL年少者が直面している問題は、それぞれの居住する地域、家庭環境、教育環境など子どもたちを取り巻く多様な環境と複雑に絡み合っていて、一様でないことがわかる。そのような状況の中で、JSL年少者への教育を今後どのように考え、進めていくかということが、今後の課題となっている。

JSL年少者を取り巻くコミュニティにおける支援の全体像は図1のようにモデル化できる。JSL年少者に対するコミュニティの支援には、直接支援として、学校教育、団体・組織、個人、家族の4つがあり、さらに間接支援として行政の支援が考えられる。ここでは、個別に解説していく。

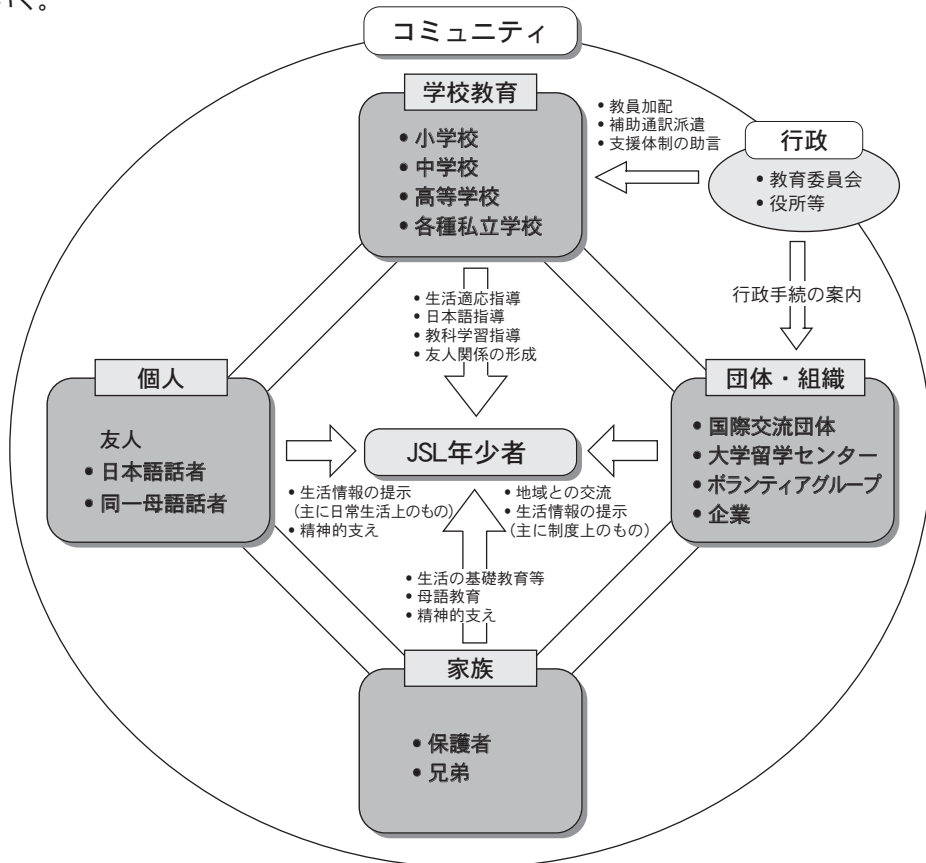


図1. JSL年少者の支援モデル

2.1 直接支援

1) 学校教育の支援

まず一つめは、学校教育の支援である。ここでは、生活適応指導、日本語指導、教科学習指導、友人関係の形成などの支援が行われる。生活適応指導は、まず、日本の学校生活に適応するように、挨拶や学校などの規則に加え、日本の生活に一日も早く馴染ませるための指導が行われる。この時期においては、特に補助通訳の支援が必要となる。それから、さらに中期指導、後期指導へと進み、基本的な日本語の習得、および文字言語の習得へと入っていく。こうして、日常会話ができ、生活にはほとんど困らない程度の文字言語を習得する。多くの場合、JSL年少者を取り巻く学校や教師、保護者たちは、その段階で子どもたちが日本語ができると判断し、特別な日本語指導はせず、他の日本人児童生徒と同じように教科学習指導を行っているのが現状である。宮崎においても同じで、日本語指導を1年程度受けると日本語指導は必要ないと判断されている場合が多い(松井・早野 2006、2007)。

しかし、日常会話に必要な日本語能力と教科学習に必要とされる日本語能力には大きな差がある(井上・早野 2006)。それは、日本語支援は日本語の指導であるが、教科学習においては、語句や構文からなる言語項目と社会、歴史、地理からなる文化項目等が複雑に関係し、日常会話からは容易にわからない様々な要因が学習を困難にさせているからである。

また、学校教育において、JSL年少者と日本人双方に対する異文化理解教育にも積極的に取り組んで行くことが望まれる。JSL年少者にとっては、母国・母文化に誇りを持つことにも繋がりが、アイデンティティの確立にも関係してくる。また、日本人児童生徒にとっても、日本において他国の文化・習慣を直接見聞きし、それに触れることで、自国の文化を見直したり、他の文化との違いを認識することもできる。そのことが、それぞれの文化に対する自信と誇りを与え、双方の子どもたちの人格形成、および友人関係形成にも繋がると考えられる。

Cummins (1984) は、マイノリティ (Minority) 言語話者が第二言語能力を伸ばすには、第一言語の発達が必要であると説明する。第一言語の基礎がしっかり確立していれば、第二言語で学習したことも、第一言語にスムーズに移行でき、第一言語が第二言語の発達を促進するという。したがって、第一言語の基礎ができていない場合は、第二言語習得の習得速度が遅く、第二言語から第一言語への移行もないのである。JSL年少者の日本語能力を伸ばすためにも第一言語である母語と母文化の教育が必要なのである。

現在の学校教育においては、多くの場合まずJSL年少者に日本社会に馴染ませることが大前提で、JSL年少者の母語教育についての視点は、まだないのが実情である。今後はこうしたマイノリティ言語であるJSL年少者の母語や母文化を異文化理解教育に積極的に活用し、そのような場でJSL年少者たちを活躍させることが、子どもたちの人格の形成や学力の向上にも影響を与える。

2) 団体・組織の支援

二つめは、団体・組織からの支援である。ここでは、地域住民との交流による異文化理解の促進や日常生活における生活情報の提示(主に制度上のもの)等が行われている。現在宮崎県においてもいくつかの交流団体や組織、機関によって、在住外国人に対する支援活動が行われている。そのなかでも宮崎県国際交流協会(宮崎県国際交流センター)では、「外国人のための日本語講座」が開かれており、毎回多数の在住外国人が学んでいる。JSL年少者の参加はほ

とんどないが、高校生（交換留学生）やJSL年少者の保護者などが参加している。保護者のこうした日本語学習は、JSL年少者の学習をサポートする上でも貴重な支援となる。また、制度面での手続きや、生活上での相談窓口としても利用されており、それに関連した図書も多数揃っている。年に数回、国際交流フェスティバルや料理教室、チャットなども行われ、特に宮崎市近郊に住む在住外国人にとって心強い存在となっている。

しかし、残念なことは、そのような支援活動について、県内の学校教育関係者、行政（教育委員会、役所等）、団体・組織、一般県民の多くに十分に周知がなされておらず、各関係機関との情報の交換、人材交流などの横のつながりが十分でないのが現状である。長年培われてきた国際交流のノウハウや資料、情報を持つ宮崎県国際交流協会などが、コミュニティ・ネットワークの核となり、各関係者との連携を早急に実現する必要がある。

3) 個人の支援

三つめは個人による支援である。日本語話者や同一母語話者などの友人から得られるものは生活情報（主に日常生活のもの）の提示だけではない。毎日多くの時間を学校で一緒に過ごす友人の存在は、学びや遊びの中で受けるさまざまなストレスの解消に大いに役立っている（松井・早野 2006）。これは保護者にとっても同じであり、学校からの連絡等において、わからない時には、気軽に電話等で尋ねたり、相談したりしている。このような身近な友人の存在は、JSL年少者および、保護者双方にとって、大いに精神的な支えとなっている。

4) 家族の支援

四つめは、家族の支援である。家庭においては生活の基礎教育や母語教育など、子どもたちの成長に最も基礎的なものであり、JSL年少者にとって、最も心の休まる場であり、精神的な支えとなっているといえる。既に述べたが、特に母語教育については、保護者から十分に母国語、文化、習慣などについて学習することが大切である。それは、JSL年少者の概念や人格形成にも重要であり、そのことが、第二言語を学ぶ上でも助けになる。また、JSL年少者の日本語教育と併せて、保護者に対する日本語学習支援も重要である。子どもたちの日本語力の向上に合わせて、保護者たちも組織的な日本語学習を望んでいる（松井・早野 2007）。保護者たちの日本語習得によって、家庭におけるJSL年少者への日本語学習への支援が期待できると考えられる。

2.2 間接支援

以上四つの直接支援に加え、間接支援として、行政の支援がある。

行政の支援

これは、行政側である教育委員会や、役所からの支援である。教育委員会からは、日本語指導教員の加配、補助通訳の派遣、支援体制の助言などが行われ、役所からは行政手続きの案内といった間接的な支援が各学校や各団体になされ、それぞれの支援活動をバックアップしている。

現在、宮崎県の宮崎市において、JSL年少者の小学生は27人、在籍校数は10校で、中学生12人、在籍校数9校である。その内、日本語指導専任教員の加配が行われているのは、5校であり、補助通訳は中学校に2人と小学校に1人派遣されている。日本語指導教員の加配を受け

ていないJSL年少者在籍校において、JSL年少者の現在の日本語習得がどの程度かは定かではないが、在籍校全てに支援の手が差しのべられてはいない。そして、日本語指導教員として加配される教員たちも、決して、日本語教育の専門家ではなく、ある日突然JSL年少者を前にして、その対応に苦慮しているのが現実である。また、補助通訳として派遣される人材も資格や経験を問われることはない。ここでも補助通訳自身の生活言語能力の習得と、学習言語能力の習得がどのように行われているかが、JSL年少者の教科学習に大きな影響を及ぼすことになる。したがって、日本語指導から教科学習へと少しでも効果的な指導が行なわれるためには、生活指導を中心にした初期指導から中期、後期指導へと教科学習に向けて、それに見合った補助通訳の派遣が望まれる。教育委員会としても、現場の実態、困難さを知ることが大切で、そこからの確な後方支援の方法が見えてくる。日本語教育の専門家を受け入れることは難しいと思われるが、教育委員会が主体となって、日本語教育に関するセミナーや研修会などを開催し、最も大変な立場に置かれている現場の教師たちに、日本語教育についての情報、資料、方法を提供することは可能である。さらに大学の教員養成課程においても日本語教育に関する講座を開講するなどの方法もある。

役所の受け入れ窓口には、常時外国語に対応できる専門のスタッフが配置されることが理想である。さらには手続きの簡素化や日本の学校制度や教育方針、規則、一年を通した学校行事や活動について何力国語かに訳された冊子の作成が急がれる。これについては、松井・早野(2007)でも指摘した保護者の不安を取り除くことに役立つ。JSL年少者を多数受け入れている栃木県真岡市においては、JSL年少者に対する先進的な取り組みが行われている。真岡市教育委員会は、JSL年少者のために英語、ポルトガル語、スペイン語各版の就学案内を作成している。松井・早野(2007)でもJSL年少者の少人数地域における制度面の問題点を挙げたが、真岡市のような先進地域での取り組みや資料、情報を参考にすることで、解決できる部分も多い。今後のJSL年少者支援において、各地域、各学校の先進的な取り組みを互いに利用したり、共有化することで、さらに支援を発展させていくことが必要であろう。

4. おわりに

JSL児童生徒を取り巻く支援は一つのコミュニティとして構成されているので、それらのどれが欠けても活動不能になることが予想される。そのため、JSL年少者の生活、言語環境を整えるサポートについては早急に検討され、然るべき対応がなされることが望ましい。そこで、学校教育、団体、個人、家族による直接的な支援を中心に、行政側による間接的な支援も充実されていかなければならない。

調査結果一覧表 1

I 話者の属性項目							II 家庭生活項目						
1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	1	2	
児童生徒の学年(年齢)	来日前の学年(年齢)	父母の国籍	在住期間	今後の滞在期間	来日目的理由	日本での学校入学は、スムーズに行われたか。スムーズ○ 否×	日本人の友だちができたか。できた○ できない×	家では、子どもと十分話す時間があるか。ある○ ない×	保護者自身、現在日本語を勉強しているか。はい○ いいえ×	家では子どもと何語で話しているか。	日本の学校教育についてどう思うか。	子どもは現在日本語指導を受けているか。はい○ いいえ×	
A	小学1年生(6才) 小学2年生(8才)	来日後誕生	父 バングラデシュ 母 バングラデシュ	10年	1~2年 大学での研究	○ 大学の手伝いがあった。	○	○	× 今は勉強していないけど、ちゃんと日本語を勉強したい。	○ 子どもとは日本語。親たちはベンガル語で話す。	○ 勉強だけじゃなくて、自然や文化の教育もあって大変いい。	小学2年生× 小学1年生×	○ 1年生の頃勉強した。 ○ 1年生の初め頃少し勉強した。
B	小学3年生(9才) 小学5年生(10才)	小学4年生(9才) 小学5年生(10才)	父 インドネシア 母 インドネシア	5.5年	3年以上 大学での研究	○ 大学の手伝いがあった。	○	○	× 今は勉強していないけど、ちゃんと日本語を学びたい。	○ ほとんどインドネシア語、親の日本語は「変。」と言ってインドネシア語で話す。	○ 勉強だけじゃなくて、自然や文化も勉強しているからとてもいい。	小学3年生× 小学5年生×	
C	小学1年生(6才)	3才	父 ネパール 母 ネパール	3年	3年以上 大学での研究	○ 大学の手伝いがあった。	○	○	○ 大学の日本語クラスで勉強している。(ときどき)	○ だいたい日本語。英語とネパール語もつかう。	○ 勉強の方法が多い。遊びの中でも勉強できるものがたくさんある。自然や文化についてのこともおしえる。父親のプログラムがすくない。母親のものがおおい。英語の勉強がない。	小学1年生○	
D	小学2年生(7才)	1才	父 中国 母 中国	6年	1年以上 大学での研究	NR NR	○	○	○ 日本語クラスには入っていない。でも専門の勉強を通じて勉強している。	○ 中国語と日本語。中国語がわからなかったら、日本語で日本語がわからなかったら、別の方法で話す。	NR	小学2年生×	○ 1年生のときだけ勉強した。
E	小学1年生(6才) 小学5年生(11才)	幼稚園(5才) 小学5年生(11才)	父 チェコ 母 アメリカ	0.5年	1年以下 日本文化をみるため	○ 祖父が日本に長く住んでいる。	×	○	○ 国際交流センター主催の日本語講座で	○ 英語	○ ならうことのはばが多いとえば家庭科、しゅうし。	小学1年生○ 小学5年生○	○ 他の児童と同じく、じぎょうをしている。 ○ 国語と社会と他の時間、一年生の国語の本を利用して勉強している。その他に先生が日本語をおしえている。子どもはクラスにすわって、なるべくさんかしている。

Ⅲ 学校生活項目				Ⅳ 話者要望項目					
3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
日本の学校教育への要望があるか。	学校、クラス担任、友だちとの間でトラブルや悩みがあるか。	トラブルや悩みはどのようなように解決しているか。	日本の学校教育や生活の中で理解できないことがあるか。	子どもに日本語を教えているか。 はい ○ いいえ ×	子どもの日本語能力についてどう思うか。 はい ○ いいえ ×	子どもの将来の学力について不安を感じているか。 はい ○ いいえ ×	日本語学習、その他の教科学習について要望があるか。	母語保持のために何か特別なことをしているか。	その他
・学校からのれんらくを英語でしてほしい。	・学校からのれんらくがよめない。 ・学校から帰ってから日本人の子どもと遊ばないので心配。	・クラスの先生からの電話がある。 ・日本人の友だちにきく。 ・そのままにしている。	特に無い	× ・子どもは日本語にこまっていない。	・子どもの年のレベルはある。 ・今のところはもんだいがない。	○ ・国に帰ってからこまらなように英語とコーランを教えている。	・今はまだ1年生と2年生なのでいいでしょう。 ・英語のテレビを見せたい。	・リスニングの練習のために、英語のテレビを見せたい。	・大切なことは母国語で話したいけど、子どもがわからないから、日本語をつかう。これがストレスになる。
・今のままでいい。 ・学校からのれんらくが英語だったらいい。	・しゅくだいがむずかしい。 ・学校からのれんらくがよめない。(漢字のもんだい)	・先生にきく。 ・クラスの先生から電話がある。 ・子どもの友だちの親に聞く。	特に無い	× ・ほんたいに子どもたちからおしえてもらう。	とでもじょうず。	× ・母国と日本の教育のシステムはちがうけどもんだいはない。	・ほかの勉強にやくだつたので、日本語をもっと勉強したほうがいい。	・母国語で話すことだけ楽しんでほしい。 ・書くのはもんだい。	・イスラム教の「コーラン」を読むためにアラビア語をおしえている。
・今はだいたいいい。でも、英語をおしえてほしい。 ・学校からのれんらくがわからないのでそれがたいへん。	・学校からのれんらくはかんじがよめないからときどきわからないことがある。	・クラスの先生にきく。 ・友だちにきく。	ない	○ ・子どものしつもんをちゃんとこたえる。	・たぶんいいとおもう。 ・子どもからおしえてもらう。	○ ・子どもが母国にきょうみをもたない。 ・子どもがきょうみをもたなければ、おしつけてもむりだから、今はそのままにしている。	・算数ではおぼえるのがおおい。なぜそのこたえになるのかおしえてほしい。それでは子どもはむずかしい。 ・英語をおしえてほしい。	・ねるときに日本語・英語・母国語の本を読んでいる。 ・ネパール語や文化のビデオを見せたい。	・今はなるべく日本語で会話している。たくさんのおしえたら子どもたいへんだから。 ・子どものためにたいせつなことをいつかかんがえている。 ・クラスの先生がときどききてほしい。
NR	NR	NR	NR	○ ・交流のために必要だから。	・毎日の会話の問題はない。でも日本人の子どもと比べたら少しレベルが低い。	○ ・学校での勉強は部分的なもの、日常生活の言葉をたくさん知らない。これが勉強に影響すると思う。でも家庭で教えることはできない。	できる先生がいらないなら、もっとたくさん日本語を教えてほしい。 ・母国についてのこと教えてほしい。	・中国語でできるだけではない。	・中国語のできる先生がいてほしい。
・1年間しかないので特に無い。	・言葉が十分わからないから自分のきもちをいえない。 ・特に小学5年生の子どもは、よくわからない。	・クラスの先生に相談する。	無い	○ ・しゅくだいのでつだい。	・よいてどおり。	× No	・小5の先生と週2回はそうだんしている。それでまんぞく。	・本を読ませている。	NR

調査結果一覧表 2

I 話者の属性項目							II 家庭生活項目					
1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	1	2
児童生徒の学年(年齢)	来日前の学年(年齢)	父母の国籍	在住期間	今後の滞在期間	来日目的理由	日本での学校入学は、スムーズに行われたか。スムーズ○ 否×	日本人の友だちができたか。できた○ できない×	家では、子どもと十分話す時間があるか。ある○ ない×	保護者自身、現在日本語を勉強しているか。○ はい × いいえ	家では子どもと何語で話しているか。	日本の学校教育についてどう思うか。	子どもは現在日本語指導を受けているか。はい ○ いいえ ×
F	小学2年生(8才)	小学1年生(7才)	父 日本 母 フィリピン	7年	永住	家族と一緒に住む為	○	○	母 ○ ・仕事仲間の会話を通して勉強している。	日本語ときどき英語	・教育のレベルが高い。子どもが興味を持ったりいろいろなことにチャレンジできるようにコンピューターを使っている。	小学2年生 × ・近くの町に週に一回正しい発音に通っている。 ・民間の日本語クラスにも通わせたいが経済的にも時間的にも無理。
G	小学3年生(9才)	小学2年生(8才)	父 日本 母 フィリピン	7年	永住	家族と一緒に住む為	NR	NR	NR	NR	・レベルが高い。	小学3年生 × ・近くの町に週に一回正しい発音をするためにレッスンに行っている。
H	小学1年生(7才)	幼稚園生(7才)	父 韓国	0.08年	3年以上	仕事	○	○	母 ○ ・県国際交流センターの日本語講座で勉強している。	韓国語	・勉強中心より、体を動かしたり、遊ばせたりするところが良い。	小学1年生 × 相談のつてくれるところがあんまりないし、前に経験なさっている人もほとんどいないため、こまっています。
	小学6年生(12才)	小学5年生(12才)	母 韓国									小学6年生 ×
I	小学2年生(8才)	0.5才	父 中国 母 中国	8年	長期定住	帰国者家族	○	○	母 ○ ・家庭と仕事場で自分で勉強している。	日本語と中国語	・勉強するものが広い。勉強以外の他に花を植えたり米をつくったりもできる。 ・算数の教科書が易すぎる。学校の教科書の内容は試験の70%ぐらいで、30%は自分で勉強しなければならぬ。	小学2年生 ×
J	中学3年生(14才)	小学2年生(8才)	父 中国 母 中国	6年	永住	帰国者	○	○	母 × ・今は勉強していないが。でも仕事で日本語が大切。	中国語	NR	中学3年生 ○
K	中学1年生(13才)	NR	父 中国 母 中国	NR	長期定住	帰国者	○	○	○ ・仕事やテレビで勉強している。先生はいない。	中国語と日本語	・普通 ・勉強時間が少ない。 ・厳しくない。	中学1年生 ○
L	中学1年生(13才)	中学1年生(13才)	父 スイス 母 台湾	0.6年	3年以上	仕事	○	○	父 × 母 ○ ・大変困った。 ・誰かの手伝いがいると思った。。	中国語、日本語、英語	・普通 ・英語の教育のスタートが遅すぎる。	中学1年生 ○ ・学校が終って週二回日中友好協会の「日本語教室」で勉強(1ヶ月くらい)。 ・パソコンでも勉強している。 ・公文式塾に行っている。

注1: 表記はできるだけ、話者が実際に表記したり、話したりしたものを尊重した。

注2: 話者Fの回答は英語表記のため調査者が翻訳したものである。

注3: 話者Lは補助通訳あり。

Ⅲ 学校生活項目				Ⅳ 話者要望項目						
3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	
日本の学校教育への要望があるか。	学校、クラス担任、友だちとの間でトラブルや悩みがあるか。	トラブルや悩みはどのように解決しているか。	日本の学校教育や生活の中で理解できないことがあるか。	子どもに日本語を教えているか。 はい ○ いいえ ×	子どもの日本語能力についてどう思うか。	子どもの将来の学力について不安を感じているか。 はい ○ いいえ ×	日本語学習、その他の教科学習について要望があるか。	母語保持のために何か特別なことをしているか。	その他	
特に無い	・友達との間でのトラブル。 ・言葉や勉強の他問題がある。	・子どもの友だちの親に相談する。	無い	×	・子どものほうが親よりじょうずだから。	○	・他の親と同じく、良くなることを考えている。	NR	・特にない、いつも親切にしてもらってるので感謝している。	
厳しくしてほしい。	・学校やクラスからの連絡がわからない。	・家族と相談して解決する。	・制服がない	NR	NR	NR	NR	NR	NR	
・英語教育の強化。 ・学校からの連絡が英語だったらいい。	・言葉がわからないから、自分のきもちがはなせない。 ・日本の学校のルールがわからない。	・家族で解決する。	特に無い	○	・まだまだ赤ちゃんくらいだと思っているが、どんどん良くなると信じている。	○	・うまく言葉が通じないと何もできないし、難しいと思っている。	・英語教育強化。	している。	無し
・外国人の子どもを専門に教えてくれる先生がほしい。もしそうでなかったらじめにあたりずめる。 ・日本語をもっと教えてほしい。(子どものために、お金を出して日本語を勉強させられない。)	特に無い	NR	・中学生以上が制服にスカートをはいている。 ・冬に小学生が半ズボンをはいている(風邪をひきやすいのでは)。	○	・子どもの知らない漢字をいっしょにらべたりする。	○	・少し心配、不安。 ・子供の勉強が段々難しくなってくると親が教えられない。	・今は低学年だから授業を聞くのは問題ないと思う	・特に何もしていない。	・市内に、中級レベル以上の日本語講座があるといい。授業料はできるだけ安く、あるいは無料で)
NR	NR	NR	NR	×	・親の日本語は正しくないから教えることはできない。	○	・心配。 ・大学へ入学が心配。	特に無い	NR	NR
NR	無い	NR	NR	×	・親より子どものほうがじょうずだから	NR	NR	NR	している	NR
・日本の学校の教育内容の英語か中国語のいろいろな資料、情報、方法などがほしい。	・言葉が通じないので、自分の意思が伝わらなくて友だちが離れていく。 ・学校やクラスからの連絡、規則、授業がわからない。 ・宿題ができない。	・家族で相談 ・通訳に相談する。	・学校の制服があること。(高いし実用的でない。不自然。) ・部活動の帰りが心配。 ・夏に教室に冷房設備がなく勉強できない。 ・靴を脱ぐことが理解できない非常に不便。	×	・親が日本語をぜんぜんはなさない、わからない。	NR	×	・英語を教えてほしい。	・英語のビデオを借り、見せている。	・転学・入学の時は、言語学校、補助言語指導の人員は必要。

[参考文献]

- 石井恵理子 (2006) 「年少者日本語教育の構築に向けて - 子どもの成長を支える言語教育として - 」 『日本語教育』 128 日本語教育学会
- 井上佳代・早野慎吾 (2005) 「外国人児童に対する教育支援の現状 - 宮崎地区の調査から - 」 『宮崎大学教育文化学部紀要』 教育科学 14
- 川上郁雄 (2003) 「年少者日本語教育における『日本語能力測定』に関する観点と方法」 『早稲田大学日本語教育研究』 2 早稲田大学院日本語教育研究科
- 川上郁雄・石井恵理子・野山弘・池上摩季子・斉藤ひろみ (2006) 「JSLの子どもたちとともに」 『月刊日本語』 アルク
- 川上郁雄・高橋理恵 (2006) 「JSL児童の日本語能力把握から実践への道すじ」 『日本語教育』 128 日本語教育学会
- 斉藤ひろみ (2002) 「学校教育における日本語学習支援」 『日本語学』 2002. 21 明治書院
- 佐藤和之・早野慎吾 (2007) 「マイノリティ言語話者への教育支援 - JSL児童生徒多人数地域での取り組み - 」 『宮崎大学教育文化学部紀要』 教育科学 17
- ダニエル・ロング (1992) 「日本語教育における「方言教育」の問題点」 『日本語教育』 76 日本語教育学会
- 中西晃・佐藤群衛 (1995) 『外国人・児童生徒への取り組み』 教育出版
- パトラー後藤裕子 (2006) 「年少者への言語文化教育 - 模索を続けるアメリカの事例が示唆すること - 」 『日本語教育』 128 日本語教育学会
- 日比谷潤子・平高史也 (2005) 「多言語社会と外国人の学習支援」 慶応義塾大学出版会
- 藤井涼子 (2006) 「外国人児童の学習支援のための日本語教育 - 教科学習につながる日本語項目・学習指導案の提案 - 」 『日本語教育と異文化理解』 愛知教育大学国際教育学会
- 松井洋子・早野慎吾 (2006) 「年少者に対する日本語教育支援に関する研究 - 宮崎地区の現状と課題 - 」 『宮崎大学教育文化学部紀要』 人文科学 15
- 松井洋子・早野慎吾 (2007) 「年少者に対する日本語教育支援に関する研究 (2) - 保護者と家庭環境の調査から - 」 『宮崎大学教育文化学部紀要』 人文科学 16
- 山本清隆 (2003) 「外国人児童生徒の日本語指導を阻止する要因について」 『日本語教育』 117 日本語教育学会
- Cumminns, J (1984) Bilingualism and Special Education: Issues in Assessment and pedagogy. Multilingual Matters.